

# 姫路城での大名行列等体験プログラムについて

## －参勤交代の行列再現を中心に－

工藤 茂博（姫路市立城郭研究室）

### 1. はじめに

#### (1) 姫路市の概要

姫路市は兵庫県南西部の播磨地域に含まれ、播磨灘に面した播磨平野のほぼ中央に位置している。気候的には瀬戸内海式に属し、年間降水量も少なく、中近世以降は大きな自然災害も少ない安定した地域である。

明治22年（1889）に市制を施行し、以来、周辺の町村と合併を繰り返して規模を拡大してきたが、昭和21年（1946）には飾磨市と合併し、新たな姫路市となり現在に至っている。

平成17年（2005）には、香寺町、夢前町、安富町、家島町の4町と合併し、広さは東西約36km、南北約56km、総面積は約534km<sup>2</sup>におよんだ。播磨地域の交通、経済、政治、そして教育の中心地で、人口53万人の兵庫県下2番目の人口規模をもつ中核市となっている。

姫路市の北部には中国山地が東西に連なり、豊かな森林資源をもたらしている。そこを水源とする市川、夢前川、揖保川といった河川が南流し、下流域で大きな三角州や扇状地を形成し、それらが広い播磨平野となっている。平野には、基盤層が侵食残丘となった標高30mほどの小丘が点在する特徴ある景観を呈している。平野を縦断する河川は、それぞれの流域ごとに特色ある文化を醸成させている。

海岸部では南の沖合に家島群島が存在する。瀬戸内海は古来、畿内から中四国、九州、さらに大陸への重要な海上交通路であった。瀬戸内海の西側が多

島海であるのに対して、播磨灘は水道が広がるため航海上の難所であった。そのため、前述の主要河川の河口部などには湊や泊が設けられ、瀬戸内海東部の交通の要所であった。

#### (2) 姫路城とその城下町

##### 1) 姫路城の歴史的前提

姫路市のシンボルである姫路城が、この地に築かれた歴史的前提について述べておく。

現在、姫路市役所や国、兵庫県の行政機関は、JR姫路駅の南側に位置している。本来の中心地は旧城下町を踏襲した駅の北側に広がる市街地で、とくに城の南側で古くから商売をしている人は地域の歴史とそこで商売を営んでいることに誇り込めて、住地のことを「内町<sup>うちまち</sup>」と自称することがある。

内町は姫路城下における町人地を意味することもあり、江戸時代はそれらを姫路町と総称した。姫路城下町は、池田輝政による姫路築城時に拡張された。池田氏は最盛期、一族で播磨国、淡路国そして備前国の一部を領知する日本有数の大大名であった（図1）。その領国の中心となったのがまさに姫路城であり姫路町で、古代には播磨国府、中世には播磨府中として播磨地域の中心地であった。

播磨府中は古代播磨国府域に重なる。現在の姫路郵便局から播磨国総社あたりを中心に広がっていたと考えられる。

中世になると、赤松氏が登場してくる。一説には元弘の乱のときに赤松円心が姫路に縄張りをし、小寺氏にその要害を守備させたとされる。その後の姫路城に繋がる伝承となっているが、この頃の播磨府

中あたりの状況は守護所が置かれていたことがわかるものの、具体的なことは明らかではない。戦国時代には、畿内と中国地方との境界である播磨国は、織田方と毛利方の角逐場となった。国人領主層は織田と毛利のどちらに与するかで二分するような情勢となっていく。姫路には御着城の小寺氏の端城であった「姫路要害」があったことがわかっており<sup>1)</sup>、小寺氏が播磨府中を押さえるための拠点としていた可能性がある。

また、夢前川河口には英賀寺内があった。大坂本願寺の山陽道への布教拠点ともなっていた英賀本徳寺の寺内町で、羽柴秀吉による播磨平定戦での攻略目標の一つともなっていた。大坂本願寺と織田信長の講和により本徳寺も秀吉に降伏し、町人は姫路城下や飾磨津などに移された。秀吉は播磨を平定すると、破城を行い城郭の整理を進めたが<sup>2)</sup>、英賀寺内の解体も同じ文脈で理解でき、新たに設置される拠点城郭や町場などに経済資源や人材を集中していく狙いがあったものと考えられる。

現在の姫路城は、天正9年(1581)、中国攻めの拠点として織田信長の命により、羽柴秀吉が築いた城郭が基礎となっている<sup>3)</sup>。

慶長5年(1600)、関ヶ原合戦の論功により三河国吉田から池田輝政が入封した。輝政は秀吉の姫路城を踏襲しつつ大改修し、連立式天守を完成させ、前述のとおり城下町の拡張も進めた。輝政は徳川家

康の娘督姫を後妻とし、二人の間に生まれた男子はみな大名に取り立てられている。池田氏は外様大名ではあるが、徳川一族並みの扱いを受けた。

元和3年(1617)本多氏が桑名から移ってきた。本多氏は西の丸を造成するとともに、三の丸に御殿群を設け、現在の姫路城をほぼ完成させている。城下町でも船場川を改修して通船を可能とし、池田時代には未完であった外港・飾磨津と城下町の水路による一体化が実現された。飾磨津には池田時代より船手組が設置され、姫路藩の水軍基地となっていた。西国大名が大型戦艦の所有を禁じられたのに対し、池田氏と本多氏は戦艦を幕府より下賜され、所有が許可されている<sup>4)</sup>。さらに本多氏のあと藩主となった松平忠明は、ポルトガル船の反抗があった場合、西国大名を指揮下におき長崎への出陣と大坂城備蓄の大筒の使用を将軍から許可されている。そのため事前に家臣を長崎に派遣して艦船の確保をしていたとされる<sup>5)</sup>。つまり、西国における有事には将軍に代わって姫路藩主松平忠明に軍事指揮権が与えられる前提であった。

姫路城とその城下町は、そういう軍事拠点に築かれているのである。

## 2) 姫路城跡の整備

昭和20年(1945)の2度にわたる姫路空襲は、木造家屋の密集する市街地を焼き尽くした(図2)。この空襲で内町の大部分を焼失したが、城跡に駐屯



図1 池田時代の姫路藩領域(播磨灘沿岸)

していた陸軍第十師団の兵員はほとんどが外地へ出征していたこと、城郭建築は不燃性が高いこともあり米軍の攻撃目標とはならず、幸運なことに姫路城は焼失を免れた<sup>6)</sup>。

終戦後の混乱期には、城跡の旧軍用地には、引揚者や空襲で焼け出された市民がバラックを建てて居住したため無届建物が密集した。

姫路城は特別史跡地となったものの、蕪雑さを内包したままでは今後の都市計画にも支障をきたすうえ、文化財管理の観点からも問題となっていた。そこで管理団体である姫路市と兵庫県、文化庁、大蔵省の4者により昭和44年(1969)「特別史跡姫路城跡整備管理方針」(以下、「四者協定」とする)が策定された。四者協定により対象区域内にある諸施設の移転を進め、史跡公園化を目指した。姫山住宅や市役所、裁判所などの公共施設は史跡地外へ移転し、その跡地には文化財保護の空間として公園や市立美術館、県立歴史博物館などが整備された(図3)。

昭和61年には、指定区域とその周辺も含めたエリアの将来像を検討し「特別史跡姫路城跡基本構想」(以下、「旧構想」とする)を策定した。これにより好古園の整備、日本城郭研究センターや再開発ビル「イーグレひめじ」の建設、不法占拠物件が残っていた南部土塁の整備、電線地中化などを進めた。し



図2 川西航空機姫路製作所への爆撃

かし、この構想で盛り込まれた動物園の移転や三ノ丸(向屋敷跡)整備事業などはほとんど進まず、現在に至っている。

その後、姫路城が世界文化遺産に登録されたこともあり、旧構想を改訂した。平成23年「特別史跡姫路城跡整備基本構想」を策定し(以下、「新構想」とする)、世界文化遺産姫路城を将来にわたって保存継承することを重視し、そのための基本方針を打ち出した。新構想では、旧構想からの姫路城跡の保存管理及び整備事業に加え、世界文化遺産姫路城の

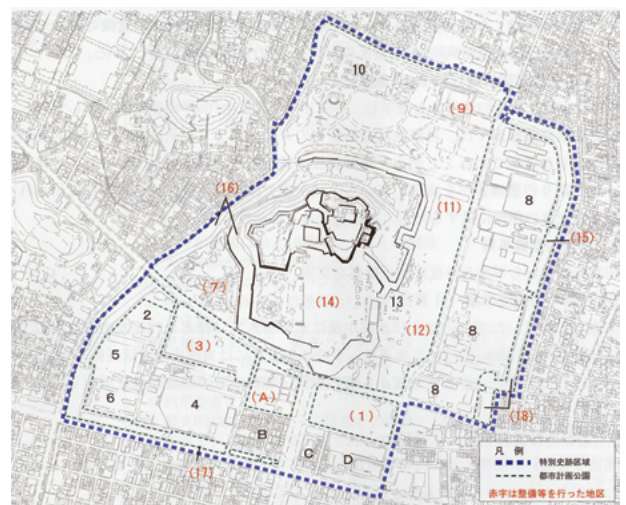


図3 四者協定の概況図

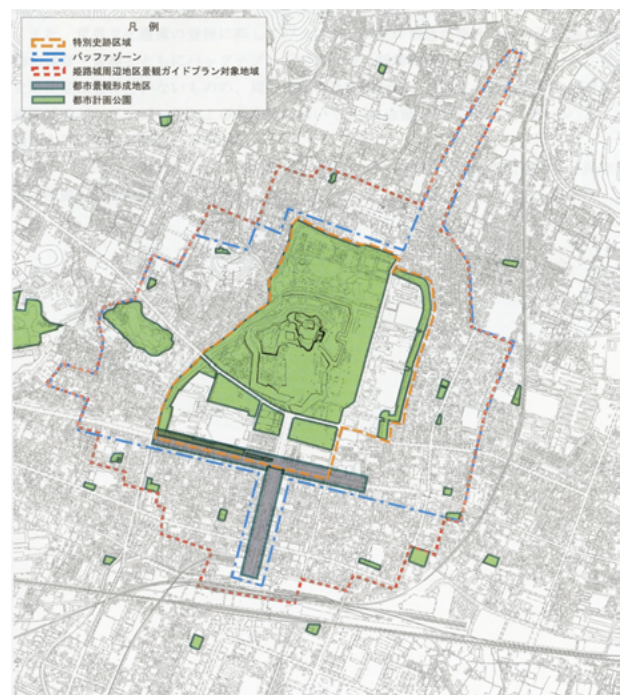


図4 姫路城周辺地区景観ガイドプラン対象地域

バッファゾーンと姫路城を一体化した景観形成を推進し（図4）、文化的景観も「資産」と捉えその価値を高める方策を検討し、さらに文化観光という概念を採用して姫路城を取り巻く中心市街地の活性化につなげようとしている。

## 2. 姫路城を活かした観光振興

### （1）大天守保存修理事業における取り組み

姫路市では、平成21年から27年までの間、姫路城大天守保存修理事業として世界遺産の本格修理を行った。いわゆる「姫路城平成の修理工事」である（以下、「平成の修理」とする）。このとき、大天守が工事中素屋根で覆われ登閣できなくなることから、観光客が激減するのではないかと議論が起これ、観光対策と文化財保存の普及啓発のために、国内初めての試みとして保存修理期間中も工事現場を見学できる施設「天空の白鷺」を素屋根の中に設置した。

素屋根設置に先立つ資料調査では、「姫路城昭和の大修理工事」の時に架設した檜の丸太による素屋根も調査したが、現在の技術では丸太での組み立ては困難であるとの結論に至った。例えば、木材による素屋根架設では前例のとおり施工するとなれば、基礎工の段階で掘削を必要とするため、地下遺構の破壊は必至であるし、燃えやすい素材は回避しなくてはならない。そこで鉄骨を使い、さらに火花の出る溶接ではなくボルトで締める工法が採用され



図5 素屋根コンクリート基礎工事（備前丸）

た<sup>7)</sup>。また、地面の掘削ができないので、鉄骨自身の自重で素屋根を支えさせるため、コンクリートのベタ基礎の上に規格の鋼材を建てていった（図5）。結果的にそのことが見学施設の設置を実現させることになったともいえよう。

「天空の白鷺」では、「工事期間中だからこそ見られる特別な姫路城の姿」と「日本の伝統的な匠の技の見学」を売り物に有料公開したのである。有料の見学施設にどれほどの集客があるものか否定的な観測をしていたものの、84万人もの見学者を動員することになったのである。その要因は、「工事期間中だからこそ見られる特別な姫路城の姿」にあったとみられる。文化財保存修理現場を広く公開することは「平成の修理」が嚆矢というわけではないが、大天守を壁のすぐ外側からの目線で、それも各階と同じ高さで天守を間近に眺めることのできる特別な見学施設であった（図6）。つまり、この時機を逃すと「特別な姫路城の姿」を見るには、最低でもあと半世紀後の次の修理工事まで待たねばならない。一般成人ならば「次の（修理の）時には死んでる」と思うはずで、まさに「今しか見られない」というスペシャルな価値が多くの人にアピールできた結果である。そこには、公益社団法人姫路観光コンベンションビューロー等の関係組織が国内外の旅行社やメディア等へ積極的なプロモーションを展開したことも奏功しているといつてよい。そうした努力があってこそ、さらに「平成の修理」を契機に世界遺産姫路城の国際的な知名度も飛躍的に向上したのであ



図6 天空の白鷺8階見学窓から天守大棟を見る

る。再オープン時には年間280万人を超える見学者が詰めかけ大いに話題となったが、その陰には「平成の修理」本格化以前からの地道な仕事があったことには留意する必要がある。こうして文化財的価値の向上とともにプロモーションとして活用したうえで新しい見学者をも開拓できた。必然的に収益が上がり、それを文化遺産保存への再投資に回すというサイクルを初めて確立することができた事業であったとも言えよう。

## (2) 姫路城を舞台にした観光振興事業

世界遺産姫路城は姫路市の市街地に位置しており、JR姫路駅から徒歩圏内にある。京阪神から在来線でも90分程度という良好なアクセスのため、姫路城のみの見学で済ませる滞在時間の短い、いわゆる通過型観光が主流を占めていることが姫路市の観光が直面している大きな課題であった。また、ローコストキャリアの路線拡大は外国人観光客の誘致に貢献した。姫路は、安い着陸料を売りにする中四国の地方空港と主要観光地である京都・大阪のほぼ中間に位置する。そのため姫路城は、地方空港に降りた観光客の格好の立ち寄りポイントとなり外国人客数を引き上げることはなかったものの、通過型に変わりはなかった。いまや国内外から年間150万人以上を集める観光地ではあっても、実態は「城だけ」なのである。「平成の修理」以前から滞在時間をいかに延長させるかが姫路観光の“永遠”のテーマとなっており、その価値と魅力をさらに磨き上げ、「城だけじゃない」ことを打ち出す必要がある。

そのため、インバウンドにも対応しながら、歴史的建造物としての姫路城の魅力を高めるとともに、さらなる観光コンテンツの強化と体験型イベントの充実により滞在型観光地へと本格的に脱皮するため、さまざまな取り組みを進めた。一例を挙げれば、姫路城内の展示の見直しを進め、VR技術を活用した解説展示の導入や「姫路お城まつり」の開催、「観桜会」など姫路城を舞台としたイベントの開催、修理工事で使用した漆喰を実際に塗ることができる体験会などを実施した。前者のイベントは姫路城とい

う名と場を借りたものであり、内容的にはこれまでも実施されてきたものや他所の催しと大きな差異はない。一方後者のイベントは、「平成の修理」で奇麗になった姫路城の白さを支える漆喰と同じものを使い、左官職人のするように漆喰塗が体験できるプログラムである(図7)。“白すぎ城”と揶揄された修理直後の姿が記憶に新しく、これ機会に姫路城に関心をもった人には姫路城ならではの体験プログラムと感じられたのではないだろうか。外国人観光客にとっても日本の伝統技術が体験でき、姫路城観光を記憶に留めてくれるものになるだろう。

## 3. 歴史体験プログラムの開発と拡充

### - Living History姫路案のコンセプト -

新構想における文化財活用の基本方針でも示されているとおり、近世城郭という歴史的建造物だけでなく、城郭とそれを取り巻く歴史文化に触れかつ体験できるようなソフトの開発と充実が、姫路城の文化財的価値をさらに高めるものと考えている。それが良質な観光資源ともなり、さらに保存管理を支え



図7 漆喰塗体験会の様子(2018年)

る財源を生み出すことになる。それは「平成の修理」で実証されたが、これからも再投資の好循環を途絶させないために、Living History（生きた歴史体感プログラム）促進事業を活用することにした。

姫路市では、観光スポーツ局がこの事業を担当し、前述のような体験プログラムを開発していく。そこで令和元年（2019）から同3年までを第1期として企画し、早期着手プログラムと段階的着手プログラム、さらに検討プログラムに区分した。「千姫・忠刻体験」「姫路城侍体験」を早期着手プログラム、「大名行列事業」を段階的着手プログラムと位置づけ、教育委員会城郭研究室が歴史的根拠に基づいた解釈を加え、その結果を反映させて再現した着衣や道具などを用いるというものである<sup>8)</sup> このうち本稿では、「大名行列事業」について述べる。

「大名行列事業」の目的は、姫路城ゆかりの大名文化として大名行列という無形文化遺産を掘り起こし、歴史都市姫路をアピールすることにある。

江戸時代にも江戸城登城や参勤交代の大名行列は、侍や町人たちから好奇の目でみられていたことがよく知られている。鳥取藩の例では、藩主の帰国を迎える熱狂的な民衆の様子や行列が通る沿道の旅館が満室になり、それでも野宿して見物しようとする者が溢れるほどの賑わいぶりが報告されている<sup>9)</sup>。姫路城下でも西国大名の参勤交代を見物したがる者が多く、家中に対しては「西国大名衆交代之節家中之者共見物等致候事は他所をも見習候為二候得は不目立候様簾之内などより見物之分は不苦候、然共歴々之衆被通候節不礼二不見様可致候事」と達しが出されている<sup>10)</sup>。藩主自ら西国街道沿いの町屋の二階から忍んでまで見物することもあったほどで、西国の大名たちがどんな行列をするのか見習うために見物するのだ、というところに本音は興味本位ながら、一方で他の大名には負けたくないという見栄も感じられ、人間味があって面白い。こうした感覚は現代人にも通じるころがあるのではないだろうか。大名行列の再現は、広く関心を集めるイベントになると思われる。

ただし、行列という集団の再現を1年限りで仕上げるのは至難である。段階的に充実させるべきプログラムという前提で、実際にイベントとして動き出してから湧出してくる不備や錯誤をフィードバックさせ、修正や補充をしていかざるをえないと考えている<sup>11)</sup>。その繰り返しが、姫路藩の大名行列を姫路独自のイベントに育てることになるものと思う<sup>12)</sup>。

## 4. 姫路藩の大名行列再現

### (1) 参勤交代の史料調査

姫路藩の大名行列を再現するにあたり、念頭には参勤交代があったことは前述のとおりである。あらためて大名行列とは何かを確認しておく、大名行列とは「大名が公式に外出するときの行列。参勤交代はその代表的なもの。近世初頭までの大名の行列は臨戦的の行事であったが、やがて政治的安定に伴って本来の意義が薄れて形式化し、様相も質実剛健から華美なものへと変化していった。」とある<sup>12)</sup>。大名が何らかの公式的な目的で出かけるための隊列がすべて大名行列ということになるが、姫路城で撮影を行った映画「超高速！参勤交代」（2014）のヒットもあったように、一般的には中高校生が学校で習う参勤交代が大名行列の典型とみてよいだろう。

ところが、姫路藩の参勤交代に関する研究はほとんどない。同藩の場合、いくつもの大名が藩主交替を繰り返したため、一つには藩政に関する史料が地元に残っていないためでもある<sup>13)</sup>。

姫路市では現在、城郭研究室が所蔵する江戸時代後期に藩主となった酒井家資料だけが残っている<sup>14)</sup>。その資料群の内容も藩政よりは酒井家の家政に関わるものが多いという実態も研究状況に影響しているのだろう。いずれにしても、所蔵する史料的条件により、再現の対象は酒井家時代を想定したものとならざるを得ない。

次に、再現にあたって行列の人数をまず把握し、それぞれの着衣、持物、行列道具などを決めていかななくてはならない。発注にあたっての下見積のベースを把握するための前提的事務作業につながるから

である。しかし前述のとおり、史料的制約により酒井家資料から参勤交代の行列規模を明らかにすることは難しい。

そこで酒井家中の子孫宅に伝来する史料のうち、藩政史料が多く良質な文書群として知られている熊谷家文書を調べた。熊谷氏は上野国出身の武士で、酒井家中では物頭など重要な職を歴任してきた家柄でもある。同家文書には、2種類の行列に関する史料が存在した。1つめは、文政8年（1825）異国船打払令が発令され、姫路藩にも摂津湾警備の担当が割り振られたことによる出陣時の行列に関するものである。2つめは、文政11年（1828）に將軍名代として藩主が参内したときの行列に関するもので（以下、文政行列帳とする）、いずれも参勤交代に直接関係するものではなかった。

根拠となる史料が見つからない中、基本に立ち返ってこれまでに刊行された『姫路市史編集資料目録集』全70巻に目を通すことにした。この作業がもっとも時間を費やすことになった。

すると『姫路市史編集資料目録集』36（1990年）所収の「西木満氏文書」に、文久2年（1862）「御

帰城御行列」が見つかった（以下、文久行列帳とする。図8）。「西木満氏文書」には同年の「龍海院御参詣御行列」「佐谷廻御行列」という帳面もあることから、この年、酒井忠績が龍海院に立ち寄り、佐屋街道経由で帰国したことがわかり、文久行列帳こそ姫路藩の参勤交代のものだと確信したのであった。

文久行列帳をひも解くと、一丁に「御発駕之節品川迄」の「御先払御足輕」と「御鷹」を連れた「御鷹匠」が配されている。江戸から品川宿まで行列の先導となるが、品川から先は同道しない「御行列外」の者たちである。また、「御鷹」の文字が大きく書かれ、その左下に小さな文字で「御鷹匠」と注が付く。おそらく「御鷹」は將軍からの拝領鷹であることを示したのであろう。酒井家は將軍から鷹を拝領されることがあった。酒井家資料では確認できないが、同じく御鷹を拝領する井伊家の例では、拝領鷹は行列に同道して帰国せず、一旦幕府の鷹匠に預けて飼育されたうえで、後日彦根に届けられる仕組みになっていたという。酒井家でも同じ扱いをされていた可能性は高く<sup>15)</sup>、品川に着いた鷹匠が御鷹を連れて江戸に戻ったとしても不思議ではない。やはり文久行列帳は、帰国の行列を記しているとみてよい。

そこで、文久行列帳から行列の構成を押さえたい。事業の規模に即して全体を圧縮する前提作業でもある。文久行列帳によると、人数は品川までの者を除くと288人の規模である<sup>16)</sup>。この帳面には小荷駄などの輜重隊が記されていないので、実際にはもっと多くの人間が行列を組んだことになる。

## （2）行列の構成

再現には、文久行列帳をベースにすることを決めた。

大名行列の再現では、そこで制作された衣装や道具をほかのイベントでも流用することを想定しているが、主目的は「お城まつり」における時代パレードのバージョンアップにある。例年の80人規模を踏まえ、大名行列も同じ程度かそれを少し上回る規模

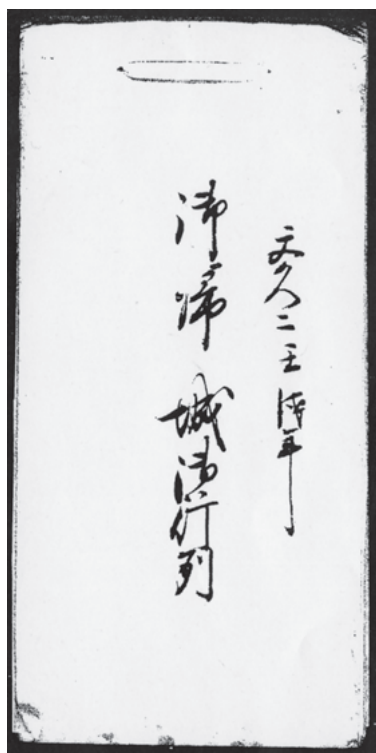


図8 御帰城御行列

が想定される。とすれば、288人を70人から100人程度にまとめる必要がある。具体的には、根岸茂夫氏が示された大名行列の基本形態（図9）を参考<sup>17)</sup>に酒井家の行列構成を見直すことにあった。

大名行列は兵種にもとづく備というユニットが、藩主のいる本陣を守衛する構成となっている。それぞれのユニットには相応の役割があるから、人や物を全体的に減らさないといけないからといって、あるユニットをまるごと削除することはしない。基本構成を崩してしまうと、行列の本質が滅失すると考えるからである。例えば、鉄砲隊の人数が多いからといってそれをすべて削除しては、本来の「臨戦的行事」という本質が誇示されない、単なるコスプレ行列になってしまう。鉄砲隊は欠かすことはできないはずである。

このような考えで、行列を構成する主要ユニットごとにそれぞれ特徴的な人と物を抽出していくことにした。いわば等倍縮小をかけるのである。この点は史実と大きく乖離するところだが、予算規模の枠に合わせざるを得ないところもあり、イベントを主催する観光担当部署の事情を斟酌したことになる。

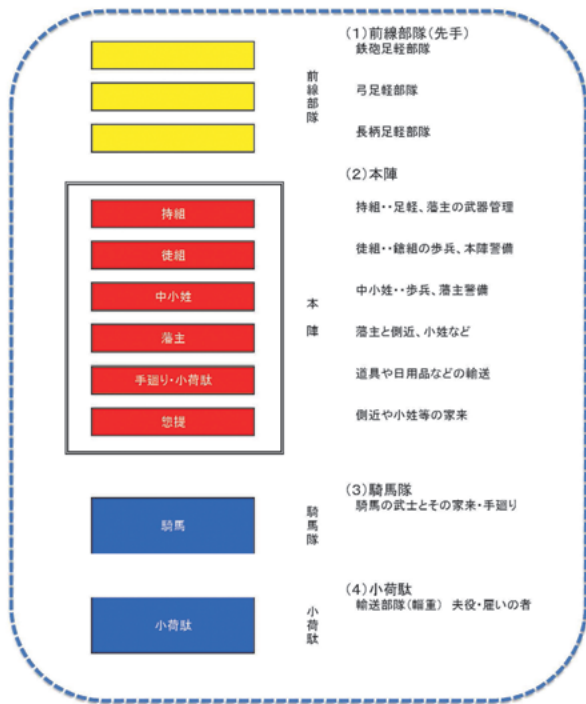


図9 行軍と陣形の基本形態

それでも絶対に外せないものはあって、それが藩主の駕籠廻りの本陣である。そうした不可欠なユニットはまず人数と道具類を確定し、想定人数から最初に引き算をしておく方法を使った。そうすると、それぞれのユニットだけ注目すると、史実と異なる貧相なものになることが十分想像できたが、行列全体で恰好がつくようになれば可とした（表1）。鉄砲隊を例にすれば、鉄砲長持あるいは鉄砲袋を持った鉄砲足軽を何人にするか、少人数となった鉄砲足軽に持たせるのは鉄砲長持と鉄砲袋のどちらが良いかを決めていく。これは槍隊や弓隊でも基本は変わらないが、それらをまとめて戦闘部隊として見劣りしない程度の規模になれば問題なしとの判断である。

または、小さくなったユニットの貧相さを感じにくくさせるため、所持する武器や持物は、選択肢がある場合は、形状や色彩が綺麗で派手なほうを選んだ。

そうした考え方で、所持する武器や持物の形状を

表1 行列の基本構成の素案

種別		調度品			備考
名称	人数	名称	数量	展示	
先払	2	①			
中間	2	金鼓鉄箱	0		
中間	2	(手空き)	2		
中間	2	鑼	2		
中間	1	②	馬印	1	
中間	5	毛鑼	5		
中間	5	鉄箱(各組用)	5		
中間	4	長持	2		
中間	2	大傘	2		
中間	1	③	長柄傘	1	
中間	1	台傘	1		
中間	2	合羽籠	2		
中間	1	④	馬口取り	1	
中間	1	馬口取り	1		
中間	1	水入	1		
中間	1	⑤	茶弁当の両掛	1	
中間	1	沓籠	1		
中間	1	草履取			
徒士組頭	1	⑥			
鑼組組頭	1				
弓組組頭	1				
鉄砲組頭	1				
徒士(1)	4	⑦	長刀	1	
徒士(2)	1	刀筒	1		
徒士(3)	1				
鑼組足軽(1)	2	⑧	鑼・化粧	2	
鑼組足軽(2)	2	鑼・化粧	2		
弓組足軽(1)	4	⑨	弓・弓矢台	4	
弓組足軽(2)	2	矢鏝	2		
鉄砲組	4	⑩	鉄砲筒	4	
棒頭	1	⑪			打揃纏代駕籠リース 家紋カバー制作
陸尺・御駕籠之者	6				
若党	4	⑫			
近習	4	⑬			
供番	4	⑭			
殿	1	⑮			
医師	0	⑯			リース対応
家老・奉行	0	⑰			リース対応
側用人	0	⑱			リース対応
通中奉行・目付	0	⑲			リース対応
坊主	0	⑳			リース対応
馬具一式	0	㉑		1	一部リース対応

合計人数 79 ※ 行列は85人



明らかにし、そこに与する人たちの衣装の問題も並行して考えていかななくてはならない。

道具については、特徴的なものは文久行列帳に注記があるので参考になるが、武器や着衣、行列道具についてはデータがない。他の大名家の行列図などから類推するのも一手ではあるが、できるかぎり酒井家関係の史料から根拠を見つけなくてはならない。

### (3) 絵巻にもとづく復元

文久行列帳によって規模や武器、持物などの配置はおおよそわかった。次にその形状や色彩を確かめなければならない。

前述のとおり、酒井家資料から参勤交代の記録を見つけることができなかったが、資料の中には絵画や工芸品も少ないながら含まれている。格納され城郭研究室が保管するようになり、それらの資料も自由に見ることができるようになった。それらの中に行列を描いた絵巻が2本残っていて、1本は「鉄砲洲警衛絵巻」(図10、以下A図とする)、もう1本は「顕徳院様將軍御名代上京行列之図」(図11、以下、B図とする)である。

A図は、嘉永7年(1854)、ペリー率いる米国艦隊の再来にあたり、姫路藩兵が江戸中屋敷に集まり、そこから鉄砲洲と佃島へ出張する行列を描いたもの

で、跋文には「行軍横図」と記されている。まさに出陣ための行軍絵巻なのである。鉄砲洲・佃島は江戸城大手門から江戸湾に最も近い場所で、敵の上陸が想定される最終防衛ラインに位置するといつてよい。そこに配備を命じられることは、幕府が姫路藩の兵力を頼りにしていることの表れともいえる。幕府は、米国艦隊が嘉永6年、浦賀に来航した時点ですでに姫路藩に対し江戸湾防衛に加勢するよう内々に命じており、再来に備えて兵士と火器が姫路から江戸下屋敷に増派されていたのである。このとき東海道筋の駅々では「姫路勢五百人出府」と風聞されたというから<sup>18)</sup>、500人という数字の正否は措くにしても、相当の軍勢が出府したことは間違いない。

中屋敷から鉄砲洲への出陣では家老の河合良臣が大将となったため、A図は河合隊中心の行列として描かれている。藩主酒井忠顕は御家の記録として残すため、御抱え絵師の仲野永秀に制作させた。実は姫路藩への出陣内命は、忠顕の養父忠宝に対して命じられたものだった。当然、準備も忠宝の指揮下で始まったのだが、嘉永6年に死去したため家督を継いだ忠顕がこの出陣を指揮することになったのだった。養父の生前の事績を記録する意味もあったとみられ、さらに、將軍徳川家定と晴光院(徳川家斉の娘、酒井忠学後室)への閲覧も想定していたようで、



図10 鉄砲洲警衛絵巻(部分)



図12 姫路藩兵とカノン砲



図11 顕徳院様將軍御名代上京行列之図(部分)



図13 食事の配給を受けているところ



図14 対金紋挟箱



図15 鉄砲足軽と猩々緋の鉄砲袋



図16 空穂

A図は全体的に丁寧かつ詳細な描写で、軍勢の行装や武器までも細部までわかるものとなっている。とくに臨戦態勢での行軍であったから、姫路藩が鑄造し配備したカノン砲（図12）や石火矢、輜重隊、そして滞陣中の炊事・配給の様子（図13）までも描かれているのは出色である。藩主ではなく家老の部隊が本陣を占めているので正確に言えば大名行列ではないが、文久行列図には描写の無い輜重隊が描かれている点で極めて有用な基礎資料である。

一方、B図は、安政5年（1858）に徳川家定のあとを継いだ家茂の將軍宣下の謝恩使となった酒井忠頭が、將軍名代として安政6年に参内したときの行列図で、A図同様、御抱え絵師の仲野永秀に描かせたものである。忠頭は、この参内で孝明天皇に拝謁し天盃を下賜される榮譽に浴している。この出来事を御家の記録として残すのが、B図の制作動機である。同時に酒井家が將軍名代で参内できる家格を顕示する意図もあった。したがって、全体的に丁寧かつ詳細な描写となっているのは、A図と変わらない。ただ、忠頭の本陣が行列に描かれていて、まさに大名行列の絵巻であることがA図との大きな違いである。

2本の絵巻が描く行列は、文久行列帳が示す参勤交代の行列とは性格を異にするが、行列に関わる人と物の復元には最も有効な基礎史料になることは間違いない。そのうえ2本とも狩野派絵師による詳細な描写である。

この時点で各々の人・物を考証している時間的な余裕はないので、とくにB図をもとに復元作業に取



図17 小馬印  
（左：「姫陽秘鑑」中：残存頭部 右：B図）

り掛かることにした（図14、15、16）。

道具や調度については名称を明らかにする必要があるが、B図には個々の名称が記されていない。家特有の名称があれば、それを反映させたかった。そこで大名行列である文久行列帳とB図を照合して道具や調度の名称を決めることにした。とくに鑪のような家を象徴する道具には特別な名称が付される場合もあるので、随時「姫陽秘鑑」<sup>19)</sup> や「武鑑」<sup>20)</sup> を参照した。すると、「姫陽秘鑑」に小馬印の絵が載っていて（図17）、その頭部と同じものを姫路城菱の門内で見ることがあった。早速、門から出して「姫陽秘鑑」と比較すると、この馬印であることがわかり、追加で復元制作をした。姫路に残る原資料から復元できた唯一の例である。

#### （4）新出絵図の活用

以上の2本の絵巻のほかに、実はもう1点、姫路藩の行列を描いた史料が存在する。西尾市岩瀬文庫が所蔵する「姫路酒井雅楽頭御行列」（図18、以下、



図18 「姫路酒井雅楽頭御行列」部分（西尾市岩瀬文庫所蔵）  
転載・複製を禁ずる

C図とする）と題箋のある折本である。本来は絵巻だったとみられる。

C図の来歴は不明であるが、剣酢漿草紋と家臣の家紋は姫路藩酒井家で間違いないだろう。左記の2本にくらべると絵は稚拙だが、総勢281人は文久行列帳とほぼ同じで、持物や道具は参考になる。また、御供の家中らは裁着袴の行装で、B図には無い竹馬を運ぶ人足も描かれている。しかし、この図を細見したのは本事業がかなり進捗した段階であったため、再現作業には反映していないが、イベントの際には御供の配列順を決める参考になるだろう。

ところで、姫路城管理事務所は令和2年度実施の「国宝姫路城大天守ほか4棟活用環境強化企画・整備業務」において、チの櫓およびりの一櫓の室内で姫路藩の大名行列を紹介すべく展示工事を進めている。ここでは本事業で制作された衣装や道具を展示するほか、C図の写真パネルで姫路藩の参勤交代も説明することとする。

## 5. 再現イベントにむけて

### (1) 衣装や道具の制作

史実と異なり行列の規模は縮小したが、再現するものはリスト化することができた。イベントの運営なども業務にあるため、仕様書などの作成、プロポーザルの実施などの事務は、観光スポーツ局が担当した。

その結果、広告代理店が受託した<sup>21)</sup>。大名行列の演出など「お城まつり」でのイベント全般を担い、実際の物の制作は、映画等の小道具制作会社がついた。この制作会社自身も大名行列のようなイベント

企画等の実績もあり、また衣装や小道具のレンタルでも実績を上げている。京都で撮影される時代劇には必ずエンドロールに出てくるような会社である。これは「時代衣装の復元等に高い知識と専門性を有し、国、地

方自治体等の公共団体若しくは博物館法上の博物館における文化事業の業務実績を有していること」との参加条件に則ったものである。

さて、衣装ではとくに生地から検証・再現し、絵巻の描写と同じ柄を織ることは我々の能力では不可能である。B図から抽出した絵柄をベースとして、まず既成の生地の中からその色合いや質、絵柄に近いものを選び、縫製する方法を採用した<sup>22)</sup>。その際、羽織や半袴の大きさは成人男子の平均的身長程度とした。駕籠舁は大柄で二枚目の仕事だったので、大きめに作った。

また、家臣の羽織には各家の家紋が付くが、絵図で判明した家紋の数より羽織の数が多かったため、藩士の家紋を調べる必要が出てきた。酒井家資料では藩士の家紋までわからないため、景福寺山に残る藩士の墓地で墓石に彫られた家紋を調べ<sup>23)</sup>、そこから図案化したものを羽織に付けた。

小袖や脚絆、股引、手甲、菅笠、腰物、鉄砲などは、特殊な形状をしているわけでもなく、外からは隠れる箇所に使用するものが多いので、時代劇撮影で使用される衣装や小道具を流用し、足袋や履物はイベント時にその都度購入あるいはレンタルすることとし、事業費を抑えた。

B図には藩主の駕籠は描かれるが（図19）、畏れ多いためか藩主の姿は描かれていない。大名行列のイベントでは藩主も登場させる必要があるため、明治初期に撮影した旧藩主の酒井忠績の写真（図20）を参考に、そこで着用する羽織の形を模すことにした。行列を構成する家臣の羽織はすべて黒を基調としているので、藩主の羽織は、黒よりは明るい茶系



図19 藩主の駕籠



図20 酒井忠績

とし、袴も金銀糸を多用するなど、家臣の袴の色合いとわざと異なるものにした。いずれも既成の生地を使用した。駕籠については復元に時間と予算を要するうえ、保管のために広いスペースをとってしまうため制作せず、イベントで必要な時にレンタルすることにした。

持物や行列道具について、A図・B図から外観はわかっても、実物が残っていないと大きさがわからない。ほかの博物館等で所蔵している物を参考に大きさを決めていき、それでもわからない場合は、図に描かれた人物との比率で大きさを推定し、あるいは衣装と同様に撮影用に制作された実績値を援用した。

こうした既成品の流用は史実と乖離しているとの批判も受けるだろう。しかし、この補助事業を年度内に完了しようとする、コンペによる業者決定から時間的に余裕がない。既往の研究や決定的な史料に欠ける場合は、前述したように調査から始めなくてはならず、一層深刻な問題である。そうなる経験ある制作会社の実績に頼らざるを得ない。適当な素材探しや制作にかかる時間が省けるなどメリットはあると感じた。もちろん、経費節約効果も考えてのことでもあった。

また、制作物を実際に使用することも考慮が必要である。「お城まつり」が開催される初夏に不特定多数の人が着用するため、間違いなく汗で汚れる。したがって、クリーニングが十分可能で補修もしや

すい素材であることが求められる。制作にあたっては、今後も継続的に使用することを想定した耐久性を考慮しておくことも大事である。

## (2) 史実と潤色のあいだ

以上のように、基本史料をもとに今後の運用・管理等も踏まえて、衣装と道具の制作を行った。そのうち次の2点は、各々の理由により潤色している。

まず、大きな長持である。参勤交代は藩主の生活を丸ごと移動させるため、多量の物資を運搬した。A図では荷駄の輜重隊も描かれるが、B図にはない。B図は洛中での行列を描いたためだろう。京都までは参勤交代と同様、江戸から多くの物資を運ぶ輜重隊が付いたと考えられる。行列には荷馬や振分も加えたいところだが、後述のとおり馬の扱いが難しいため、馬数を増やすことはあきらめざるを得ない。そのかわりA図を参考に大きな長持を加えた。A図では長持の外側に油傘が掛けられているので、中の長持自体は見えないから、大きな組み立て式の箱として製作した。この箱を通常、行列道具や衣装の収納具として利用できるからである。イベント時以外で多くの道具と衣装をどのように収納・管理するかは、将来、誰が担当してもわかるようにしておくためには重要なことである。

次に鷹匠である。文久行列帳にはあるが、B図には描写がない。他の絵図等も参考にして衣装を制作した。姫路市動物園では飼育員が鷹を調教しているので、飼育員に鷹匠として参加させ、放鷹術の実演

ができればきっと良い演出になるだろう。

今回整えたものは、本来ならば令和2年11月の「お城まつり」において披露される予定であった。残念ながら、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となってしまった。予定では、江戸時代の大名行列の所作を継承している長野県飯田市の本町三丁目大名行列保存会の協力を得て、姫路でも当時の所作を行列で演じるようになっていた。飯田市の大名行列の発端は、明治時代初めに姫路藩などの江戸屋敷等から不要となった行列の諸道具類を購入し、人宿から行列所作を教授されたものを地元の祭礼で披露してきているという<sup>24)</sup>。飯田市の大名行列に姫路藩の所作がどれほど反映されているかは明らかではないが、行列に独特の動きをもたせるのは観客を飽きさせない好適な演出である。

### (3) 法律の壁と安全性

その一方で懸念されるのは、馬の扱いである。今回、虎皮の鞍覆い(図21)を復元した。虎皮を使用できる大名は、家格が高い家に限られていた。そういう家格の大名が姫路藩主であることを具体的な物で示したかったのである。ところが馬は道路交通法では軽車両の扱いになるため、行列に加わると通行可能な道筋が限定されてしまう可能性が大きい。行列の経路は演出にも密接に関わってくることで、どのように対応するか警察との協議も踏まえて検討が必要である。

そのほか経路に関しては、姫路市街地のどの道を通るかも問題である。馬の扱いにも規定されるのだが、姫路藩の参勤交代では大手門から外京口門まで、つまり城下町東側の決まった道筋しか通行しなかったのである。史実を優先するのであれば当時の道筋で演じるべきであるが、それでは距離が短くなるうえ、市街地から外れていく。イベントの一環である以上、観客が集まりやすく見学しやすい道で実施することになるだろう。

また、鷹も行列には重要なアイテムだが、クマタカ<sup>25)</sup>などは特定動物の扱いになるため、観客のいるイベントに出すことができず、小型のハリスホー



図21 御召馬と虎皮の鞍覆

クなどを使わざるを得ない。

法律の順守は当然として、まずは観客と従事者の安全を最優先に考えれば、史実との齟齬が生ずるの仕方がないところではある。

## 6. むすびにかえて

大名行列は男の世界である。女性が入る余地はなかった。しかし、それを現代のイベントに置き換える時、性の区別は許されない。史実と隔絶するが、企画・運用において解決できるであろう。

文政2年8月15日、酒井忠実が参府のため姫路城を出立した。出立の段取りとして「殿様市川御渡船之御注進有之候ハ、女中致出立候様兼テ被 被仰出之由」という<sup>26)</sup>。女中もこの時、藩主とともに参府することになっていて、行列が市川を渡河したとの知らせが届き次第、女中も姫路城を出立するように命じられていた。つまり、参勤交代の行列の後ろには、数時間差で女中の行列が続いていたのである。彼女たちはおそらく忠実とともに江戸から前年に帰国した者であろう。

女中は在国中、城内ばかりで過ごしたわけではない。領内の名所などにも出かけている。その際、女中は「供揃」を組んで目的地へ赴いている<sup>27)</sup>。人数は、女中と下女だけで9人、奥付役人と付添、若党で11人、先払足軽2人、人足16人、駕籠舁14人の計52人。「供揃」でも立派な行列なのであった。

もちろん、「供揃」のうち女は9人だけだが、女

性のための行列が姫路にあったのは事実である。将来、この女中の行列もイベントに加えられれば、他地域の行列との差別化が図られ、歴史都市姫路のアピールにつながるのではないだろうか。

そのためには史料の探索と調査・研究を懈怠なく進めていかなければならない。

### 【参考文献】

- 1) 「宇和旧記」1974『姫路市史 史料編1』姫路市役所 pp.752-753
- 2) 多田暢久 2008「姫路城下町」『信長の城下町』高志書院 pp.192-198
- 3) 奥野高広ほか校注 1969『信長公記』角川書店 pp.321-322
- 4) 拙稿 2020「海洋の雄藩姫路－瀬戸内海の要衝としての役割」『日本マリンエンジニアリング学会誌』543
- 5) 高柳光寿ほか 1964『新訂寛政重修諸家譜 第一』続群書類従刊行会 pp.270-271
- 6) 米軍はどうすれば低コストで最大の被害を与えられるかを研究して、中小都市の空爆を行った。
- 7) 文藝春秋編 2015『世界遺産姫路城を鉄骨でつむ。』文藝春秋社 pp.9-22
- 8) 当初の素案の段階では、学術経験者等による検討会を組織し、そこが監修することになっていた。
- 9) 来見田博基 2012『鳥取藩の参勤交代』鳥取県 pp.41-44
- 10) 「御大名御通見物御免之事ほか」『姫藩典制録』巻六 姫路市立城内図書館所蔵
- 11) 当初の素案では、実施結果を検証するステップが設定されていた。おそらく検討委員会にフィードバックさせる考えだったとみられる。
- 12) 日本史広辞典編集委員会 1997『日本史広辞典』山川出版社
- 13) 国替による移動の行列については、榊原家や本多家、松平家の資料に残っている可能性は高い。
- 14) 酒井忠以が記した「玄武日記」(酒井家資料A-357-383)に参勤交代の記録がある。忠以の旅行中の動静が記され、彼の身の回りのことはよくわかるが、行列の規模や構成は記されていない。ただし、イベントの演出には参考となる史料ではある。
- 15) 根崎光男 2008『江戸幕府放鷹制度の研究』吉川弘文館 pp.179-182によると、酒井家は巢鷹を拝領している。巢鷹は雛から育てるもので、成鳥になるまで幕府の鷹匠が育てたのであろう。ただし、品川宿まで同道した鷹が拝領鷹で間違いないとすれば、雛ではなく成長した鷹ではあろう。
- 16) 元禄3年(1690)、酒井忠挙が前橋へ帰国する際に

御供の家中名を列挙した記録では、家中58人(侍分)とそのほか足軽や中間を入れると総勢367人であった(「咸休院様御入部二付御供之者へ被 仰出之事」『姫藩典制録』巻一 姫路市立城内図書館所蔵)。

- 17) 根岸茂夫 2009『大名行列を解剖する』吉川弘文館 pp.24-26
- 18) 橋本政次 1952『姫路城史 中巻』姫路城史刊行会 pp.852
- 19) 酒井家資料D 2-1～55
- 20) 酒井家資料D 3-1～26
- 21) 委託上限金額は税込で7900万円を予定していた。この範囲に収めるには、288人は大きすぎたということでもある。
- 22) 当初、羅紗に関しては制作会社に適当なものが見つかったが、地元姫路で良い羅紗を扱う店が見つかった。こういう生地素材を扱う店が地元存在することを、この事業をとおして初めて知ることができた。
- 23) 津山邦寧氏のご教示を得た(津山邦寧 2015『景福寺とその周辺の史跡』景福寺山史跡保存会を参照)。
- 24) 本町三丁目大名行列保存会ホームページ「大名行列」[iidaimyo.net/index.html](http://iidaimyo.net/index.html)
- 25) 姫路城中曲輪には鷗門(くまたかもん)がある。門名の由来は不明だが、松平氏が姫路城に移った時、榊原氏から城付の熊鷹も引き継いだという(松浦静山『甲子夜話』巻七十一、一四 姫路城中の話 平凡社東洋文庫338)。
- 26) 酒井家資料A-234「文政二己卯年御休所日記」8月15日条
- 27) 酒井家資料A-234「文政二己卯年御休所日記」3月16日条